

【ねがいましては】

平成24年1月25日

KYOWA SCHOOL

第255号

「成績」

日ごろの彼らを見ていて感じることは、勉強に対し自然体である子は本当に少ないということです。常にどうしようという不安を抱えながら机に向かう。何かを意識している・・・『成績』です。

成績はいろいろなところへと火花を散らしていきます。一番大きな矛先は親・・・テスト結果を意識するあまり、その結果を見て返ってくる親の表情と言葉がリアルに浮かび上がってきます。「今度はなんて言われるのだろう。」

それを意識する度合は、お母さんお父さんの存在の大きさに比例しているようです・・・叱られたくない。テストが近づいてくると、ますますその意識は拡大化され、ついには何をやっていてもまったく入らない。向かってはいるけれど、こころが固まってしまう。

もし成績がなかったとしたら、この場合、小学校入学のときから成績というシステムがないことが条件です。つまり数字による評価がないこと、数字はとても評価するには適している具体物であり、問題内容にこだわらず、100点と聞くと聞こえが良いものです。

真の評価とは顔が皆違っているのと同じように、理解のスピードもそれぞれが違っているのが当たり前だということを勉強の世界の常識としてはじめに伝える必要があります。子どもたちのこころは落ち着きを増します。

新幹線であつというまに目的の駅についても、そこまでの過程で何がこころに強く残ったのか、自分という人間がどのように成長したのか、はっきりとわからずじまいな子がたくさんいるかもしれません。片や、各駅ずつ降りながらその地域に生活されている方々とのふれあいに時間をしっかりと費やし、さまざまな温かいこころをその方々からいただきながら目的の駅に着くのでは、人間性に格段の差が生じるでしょう。

「べんきょうというものはね、助けあいながら身につけていくものなのです。」1年生のときからそのような言葉がけを繰り返し聞きながら成長していく子どもたちは、自分がわからなかったときに教えてくれた子に感謝の気持ちをいただきます。けっしてわかっていることがえらいことではなく、わからないことをはっきりとわからないと表現できることの方がとても人として大切なことなのだ、毎日のように先生から言われていれば、今のようにわからないことは『ハジ』だとか、『ダメ』なのだという感情もわきません。もちろん成績につながるようなテストもないわけですから、子どもたちは常に平常心のまま机に向かえるのです。

しかし、一度でも勉強はテストや成績のためにあるのだという観念を持ってしまえば、もう助け合うという気持ちはみごとに崩れていきます。スタートから勉強は助け合いながら進めていくものなのだ、こころにしまっていたきたいのです。それが定着しますと、もうあとは好循環になります。「このまえ教えてくれた〇〇ちゃんに恩返ししなきゃ、だからこんどはわたしがいっしょうけんめいがんばって、〇〇ちゃんももし困っていたのなら助けてあげたい。」

教室の中では「ありがとう」がたくさん飛び交います。競争しているわけではないので、お互いに欠けたところを助け合いながら埋めようとします。そのたびに飛び交う「ありがとう・・・」。

限りなく広がる友だちの輪、先生と児童生徒たちの信頼もほぼ100%、そして何より深い絆で結ばれるのが、母と子の絆、「きょうね、〇〇ちゃんにおしえてあげられたの、とってもうれしいって言ってくれたよ、おかあさん。」「そうだったの良かったわね、これからもいっぱい教えてあげられたらいいわね。」「うん、おかあさん、べんきょうってうれしくなるものなのね、〇〇ももっともってべんきょうするね、そしてみんなのよろこぶかおが見たい、だから先生にたつくさーんしつもんするの、先生ね、しつもんするとかならず言ってくれるの、〇〇ちゃんはやさしい子なんだね、って。」

そんな他愛のない会話をするうちに、お母さんの瞳からひとしずく流れるもの・・・。「おかあさん、どうしたの。」「〇〇ちゃん、ありがとうね、おかあさん、〇〇ちゃんのお母さんでよかった、ありがとうね。」

そんな会話があつちの家でもこつちの家でも聞かれたら・・・。

成績は子と親の絆、子と教師の絆、子と子の絆に深い傷を作っていくような気がいたします。

こころがぼかぼかと温かい状態で向かう勉強、私はこのとてつもない高い頂をめざしてこれからも歩いていこうと思います。このわたしを支えてくれているのは紛れもない、ここに通う子どもたち皆です。ここに通ってきてくれた多くの子どもたちです。

今年春、この教室から始めての「先生」が誕生いたします。先生を目指したきっかけは、この教室なのだそうです。千葉県教育委員会を受験なさったので、千葉のどこかへ赴任されます。

理想が高すぎるかもしれません。でも、子どもたちには『夢』という文字がぴったりです。一人でも多くの子どもたちのこころを温めてあげてください。子どもたちと手を合わせて『夢』に向かって歩んでください。

こころが折れそうになったら、ここへ来てみてください。忘れかけていたものを取り戻すことができますよ。

そのためにもここへ通うみなさん、わたしを助けて下さいね。わたしもあなた方をこころから心配いたします。

ちっぽけですが、本当の本物の学校だと言って言えるようなそんな学び舎をこれからもよろしく願います。

ありがとうね。